質的研究デザインの方法

青山学院大学
髙木亜希子(atakagi@ephs.aoyama.ac.jp)

0. 要旨

英語教育に関する研究を行うとき、研究者は、まずどのような理論的視点に立ち、研究を行うか明確にした上で、研究計画を立て、目的に合った研究手法を選択することが必要である。大きく分けて3つの理論的視点があるが、これまでの日本の英語教育の研究分野では、実証主義的な（positivist）視点に立った量的研究が主流であった。本発表では、質的研究の方法論について理解が深めることを目的とする。

具体的には、解釈的な（interpretive)、および批判的（critical）視点に立った研究者のために、（1）研究課題の設定、（2）データ収集の方法、（3）データ分析の方法、（4）研究の評価という観点で、質的研究デザインの方法を提示する。質的研究の具体的方法として、ナラティブ研究、現象学的研究、エスノグラフィ、グラウンデッド・セオリー、事例研究など様々な方法論がある。前半は、全ての質的研究に共通する、研究対象者の選択方法、データ収集法、倫理的考慮及び量的研究の信頼性、妥当性に相当する質的研究の信頼性(credibility)、移転性(transferability)などについて概観する。後半は、昨年筆者が指導した修士課程の学生が行った事例研究をとりあげ、グループ面接、記述式質問紙などの質的手法によるデータの収集とコーディングとカテゴリー化を用いた分析方法を紹介する。

本発表では、量的研究の枠組みにおける量的データの補完としての質的データは取り扱わないが、今回提示するデータ収集と分析方法を応用することは可能である。具体的な事例を用いて、質的な研究方法を紹介することで、質的研究を行いたいと考えている人の理解を深めるとともに、既に質的研究を行っている参加者とは、質的研究のあり方や方法について意見を交換したい。

1. 理論的視点

1.1 量的研究と質的研究の定義とは

量的研究と質的研究の定義は、以下のもので良い？
Quantitative research is empirical research where the data are in the form of numbers.
Qualitative research is empirical research where the data are not in the forms of numbers..
But.... 量的研究と質的研究は次のことを含むのです。

- the way of thinking about the social reality being studied, the way of approaching it and conceptualizing it.
- the design and methods used to represent that way of thinking,, and to collect data
- the data themselves–numbers for quantitative research, not–numbers (mostly words) for qualitative research. (Punch, 2009)

1.2 研究の理論的視点

研究デザインを行う際に、研究者が立つ理論的視点・枠組み(paradigm)は大きく3つに分類される。

① 実証主義的視点（positivist/scientific paradigm）

人々の行為には普遍的な法則・規則がある。客観性、予測、反復可能性を重視し、因果関係を説明するための調査を目的とする。科学的で実験主義的な調査を通して得られた知識は客観的で定量的であり、現実世界(reality)は静的で観察・測定可能なものである。

② 解釈主義的視点（interpretive paradigm）

人々の経験は文脈に縛られており、時、場所、人間という行為者の心と切り離すことはできない。多元

的な現実世界(reality)は人々により社会的に構築されている。参加者の行為や経験、教育のプロセスの意味を探究し理解することを目的とする。

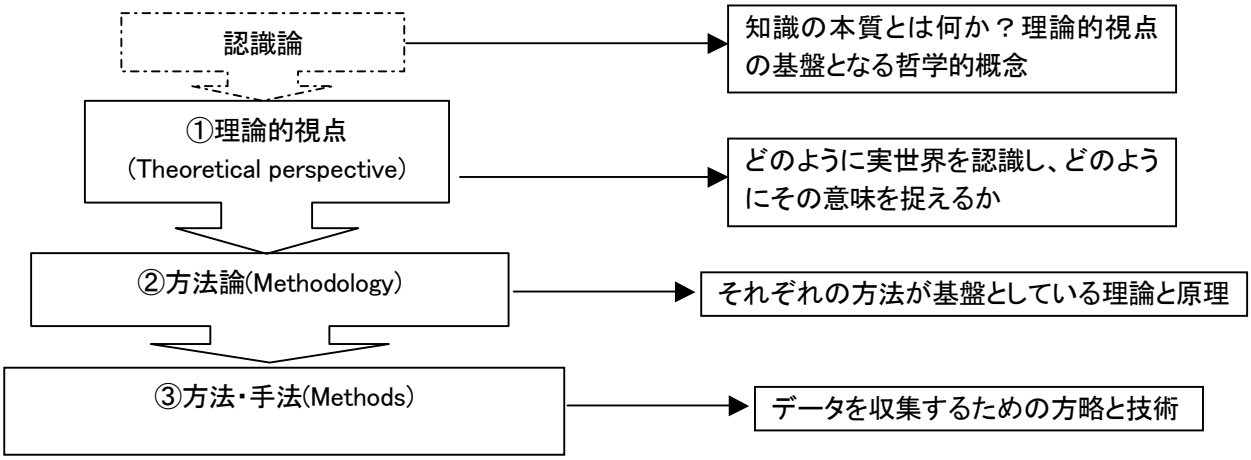
③ 批判的視点（critical paradigm）

客観的や中立的な知識は存在せず、知識は常に社会的利害に影響されている。人間の行動を解釈し、理解するだけでなく、社会的批判をすることで、社会的あるいは組織的な変化を起こすことを目的とする。

2. 研究計画

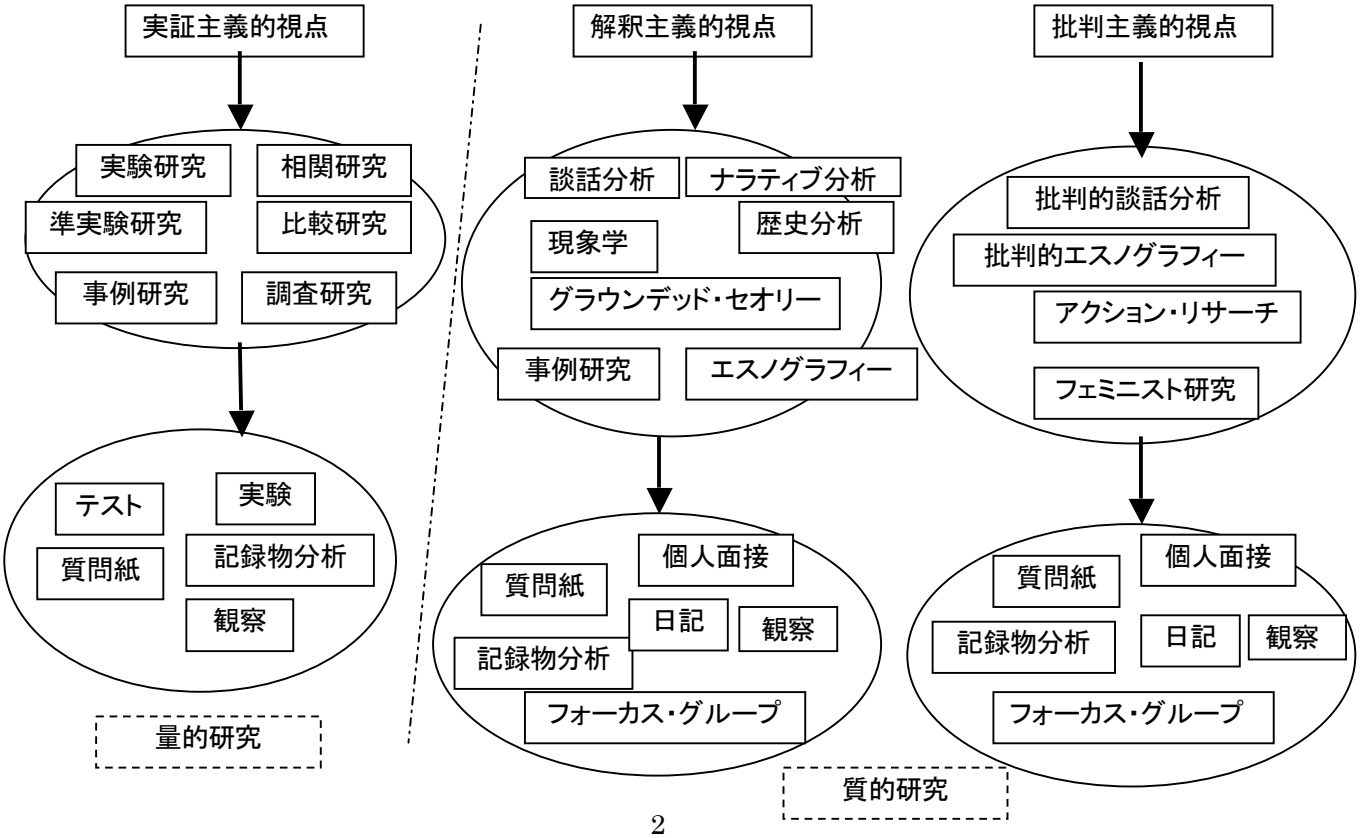
2.1 研究計画に関わる 4 要素

研究計画を立てるときに以下の 4 つの要素について認識しておく必要がある。



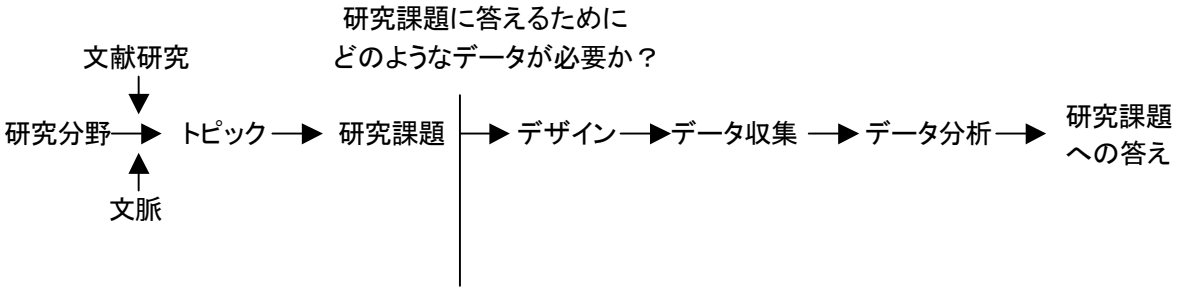
Crotty (1998, p.4)より

2.2. 量的研究（アプローチ）と質的研究（アプローチ）

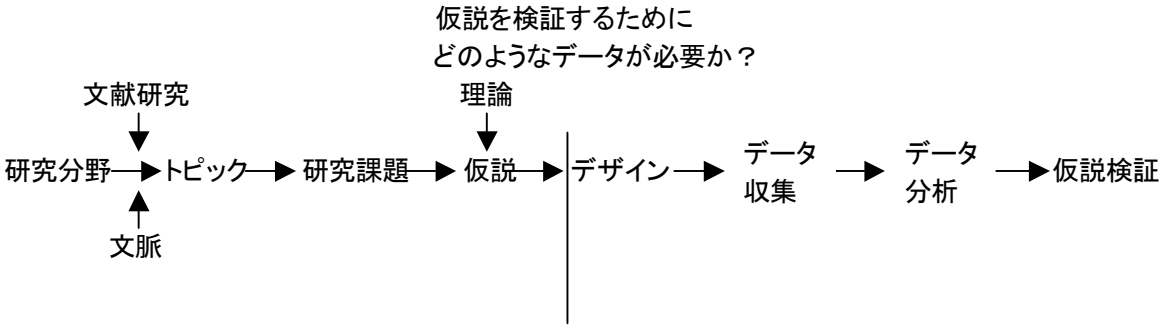


2.3 研究デザインの簡略化モデル

(a) 仮説なしモデル（質的・量的）



(b) 仮説ありモデル（量的）



（Punch, 2009, p.68より）

2.4 質的研究の特徴

- ◆ 研究者が測定用具となる
- ◆ 研究している現象に集中的/長期的にかかわる
- ◆ 研究される人々の視点（内部者の視点）をもつ
- ◆ 研究者と研究される人の相互作用がある
- ◆ データは、言葉（文字データ）が用いられる
- ◆ データは帰納的に分析される
- ◆ 濃密な記述が行われる
- ◆ 研究している現象について「全体的」（系統的、包括的、統合的）な見方を得る

（グレッグ他,2007）

3. 研究課題の設定

3.1 質的研究が適している課題

- ◆ ほとんど知られていない、また既知の理解では不十分な領域を理解するために、対象を新たな視点から見直したい。
- ◆ 複雑な状況や多重的な背景を持つデータ、変化しながら移ろいゆく現象の意味を理解したい。
- ◆ ある状況やそれを経験しているプロセスにいる対象から、彼らがそれに置いている意味や彼ら自身が経験している解釈の仕方を学びたい。
- ◆ 研究者自身のものの見方や既存の研究結果ではなく、現実を反映した理論や理論的な枠組みを構築したい。
- ◆ 現象を深く詳細に理解したい。

（小林,2008, p.22改訂）

3.2 質的研究の研究課題

質的研究では

何を発見できるかを予測するものではなく、ある方向を示すものである。オープン・エンドなもので、研究のプロセスの中で変化することも受け入れる。

例1： 文法が得意な英語学習者とそうでない学習者の違いは何であるか。

例2： 公立高校の英語教員はリーディング指導にどのような信念を持っているか。

例3： 小学校教員は、英語活動における児童の指導にどのような課題を抱えているか。

3.3 研究課題と方法論の選択

表1：5つの研究手法

研究手法	焦点	適した研究課題	データ収集法
ナラティブ研究 (Narrative research)	個人の生活の探究	個人の経験の語りを必要とする	主として面接と記録物
現象学 (Phenomenology)	経験の本質の理解	生き生きとした現象の本質の記述を必要とする	主として個人面接だが記録物、観察も使用
グラウンデッド・セオリー (Grounded theory)	フィールドからのデータに根ざした理論の構築	参加者の視点から理論を構築する	主として20～60名の個人面接
エスノグラフィー (Ethnography)	文化を共有するグループの記述と解釈	あるグループに共有された文化の傾向の記述と解釈をする	主として観察と面接だが別のデータも取りうる
事例研究 (Case study)	一つ以上の事例の深い記述と分析	ある事例について深く理解する	面接、観察、記録物などの複数データ

(Creswell, 2007, p.79より)

4. 研究対象者の選択、データ収集法、倫理的考慮

4.1 研究対象者の選択

質的研究における「参加者(participant)」、「情報提供者(informant)」は、量的研究の「被験者(subject)」の役割と大きく異なる。量的研究でよく使用される無作為抽出や確率標本抽出ではなく、場所や時間も考慮し、研究の目的に合った対象者を意図的に選択する。

4.2 データ収集法の種類

4.2.1 面接

研究参加者から生活や経験のある側面について話を聞くことができる。面接者と参加者の間のやりとりによる相互作用で、研究課題に対する答えるデータを引き出すとともに、研究者に新しい洞察を生み出させる。

①構造化面接(structured interview)

　前もって用意された質問項目に従って、面接を行う。参加者には同じ質問を同じ順序で質問していく。面接時間を短縮し、面接者の影響を抑えることができるが、反応を方向付けてしまう。

→量的研究で用いられるが、質的研究ではほとんど用いられない。

②半構造化面接(semi-structured interview)

　おおざっぱに構成された質問項目を用意するが、質問の順序は参加者によって変えることができ、参加者の反応によって、質問を発展させることもできる。

③非構造化面接(open-ended interview)

　研究課題に関する一般的な質問を行う。面接者は自由に参加者に質問を行うことができる。

4.2.2 フォーカス・グループ
研究参加者の相互作用を利用するグループ面接で、研究者はディスカッションを進める議長役となる。グループのフォーカス（質問、写真、ビデオなどの刺激）を紹介し、研究参加者の発言に応答しコメントすることで、データを形成、発展させることができる。

4.2.3 観察
人工的な状況をつくるのではなく、自然な状況において、内部の人の意味の世界を経験し、観察された人々の社会的現実を検証する。量的研究における観察は、体系的で頻度やパターンをコード化、カテゴリー化して、記録を行い数値的な処理をする。質的研究では、濃密で詳しい記述(thick description)が必要であり、発話、非言語コミュニケーション、出来事が起こった時間、環境や雰囲気、観察者のコメントなどをできるだけ詳細に記述する。

①完全な観察者(complete observer)
　研究者ということを述べずに、その場に参加せず、状況に影響を与えることなく、観察を行う。
②参加者としての観察者(observer as participant)
　研究者ということを明らかにして、観察者としてその場に参加する。
③観察者としての参加者(participant as observer)
　既に参加者として関わっている場において、研究者ということを明らかにするとともに、観察者としての役割を説明して観察を行う。

4.2.4 質問紙
量的研究では、選択式質問項目で、統計的な処理を行うが、質的研究では、記述式質問項目でオーブン・エンドの回答を記入してもらい、面接の基礎データにしたり、記述をラベル化、カテゴリー化して分析を行う。

4.3 倫理的考慮（ethical consideration）
質的研究では、特に研究参加者の倫理的な考慮に注意する必要がある。
①インフォームドコンセント
　研究者は、研究参加者にデータ収集を行う前に完全に研究の手続きについて情報を与え、研究に参加する承諾を得なければならない。
②欺いてはならない
　研究参加者を欺くことは絶対に避けなければならない。
③辞退する権利
　研究参加者が罰を恐れることなく自由に参加を辞退できなければならない。
④説明責任
　研究者はデータを収集した後で、研究参加者に研究全体の目的について知らせなければならない。
⑤守秘義務
　研究者は、研究のプロセスにおいて研究参加者について得られたいかなる情報に対しても、完全な守秘義務を守らなければならない。

C.ウィリッグ(2003, p25-26 改訂)

5. 質的研究によるリサーチ・デザイン：事例研究

5.1 事例研究を用いたリサーチ・デザイン

事例研究（case study）
事例研究は、「プログラム、出来事、ひと、プロセス、施設、社会グループといった、ある特定の減少についての調査」である。Bromley(1986)は、ケースを「定義可能な境界のある、自然な出来事」と記しており、事例研究は、この出来事に対して、深く、意図的で、鋭い焦点を投げかける探究である。研究者は、一般的なことより特定の出来事に関心があり、全体論的アプローチから、ケースを文脈の中に当てはめて考える。

C.ウィリッグ(2003)、ホロウェイ・ウィラー(2000)

修士論文：Kaneshige, M. (2010). *A Case study of teacher support for foreign language activities in elementary school.* Unpublished MA thesis. Osaka Kyouiku University.

研究課題： 1.小学校教員は、英語を教えることについてどのような認識を持っているか。
2.小学校教員は、英語を教えるためにどのような支援を必要としているか。
3.小学校教員を支援するのに効果的で現実的な方法は何か。

研究対象：農村部にある小規模公立A小学校

参加者： 教員 10 名（担任 7 名、校長、教頭、養護教諭）、6 年生児童 14 名

研究手法：授業観察、教員・児童対象の質問紙調査、第 6 学年担任への個人インタビュー
全教員対象のフォーカス・グループ・インタビュー

データ分析の方法：内容分析（コーディングとカテゴリー化）

※事例研究を選択した理由：学校や地域によって使える資源・導入できる制度・費やせる予算等は異なるため、各学校にどのような支援を行うべきか具体的方策を考えるために、現状の深い理解と解釈が不可欠であると考えたため。

研究手順：
① 文献研究などに基づき、研究手法・分析方法を決定する。
② 授業観察の観点について決定する。
③ 参加者に研究の趣旨について十分に説明を行い、研究承諾書にサインをしてもらう。
④ 外国語活動の授業観察を行い、フィールドノートを取る。
⑤ 授業観察のフィールドノートに基づき、児童と全教員対象の質問紙の準備と 6 学年担任対象の個人インタビューの項目を設定する。
⑥ 児童と全教員対象の質問紙調査と 6 学年担任への個人インタビューを実施する。
⑦ 授業観察のフィールド・ノート、質問紙、6 学年担任への個人インタビューのデータを参照し、フォーカス・グループのための質問を設定する。
⑧ フォーカス・グループ・インタビューを実施し、その後、録音記録を起こす。
⑨ フォーカス・グループ・インタビューのデータをコーディングとカテゴリー化により内容分析を行う。
⑩ 分析結果を別の研究者が確認し、分析が妥当なものか確認するとともに、修正を行う。

表 2:データ収集の日程

日時	プロセス	対象
2009 年 7 月 8 日	授業観察	6 年生のクラス
2009 年 8 月 28 日	質問紙調査	1～6 年の HRT と養護教諭 6 年生児童（14 名）
2009 年 9 月 2 日	個人面接	6 学年担任
2009 年 9 月 16 日	フォーカス・グループ・インタビュー	全教員（10 名）

5.2 データ分析の方法:内容分析（コーディングとカテゴリー化）

"Data analysis is a process of making meaning." (Esterberg, 2002, p.152))
Analyzing qualitative data is "an interpretive task." (Ezzy, 2002, p.73).

5.2.1 コーディングとカテゴリー化の方法

コーティングとは、テーマ、パターン、概念を探すために、データの切片を識別し、それぞれの切片にラベルを張りつけていく過程である。(Ezzy, 2002; Hesse-Biber & Leavy, 2006).

Step1 オープン・コーディング(open coding)

データを部分に分けて検討し概念化するのがコード化であるが、最初のコードは暫定的なものでよい。オープン・コーディングの段階では、浮かび上がってくるテーマを探しながら全てのデータを読み、仮のコードを付与する。

Step2 カテゴリー（テーマ）の探索

オープン・コーディングで繰り返し浮かび上がったテーマについて、コードをまとめどのようなカテゴリーが形成できるか考える。これらの作業を通じて、仮のコードの修正や変換をする。

Step3 焦点的コーディング（focused coding）

オープン・コーディングと同様にデータを最初から読み直し、コードを付与していくが、Step1・2 で浮かび上がってきたテーマに注意しながら、コードを付与する。その後似たような特徴をもつ概念のグループにコードをまとめて、カテゴリー化する。

6. 研究の質の確保と評価

6.1 研究の質の確保

質的研究の質を高める方法としていくつかあるが、ここでは 3 点紹介する。

6.1.1 三角測量(triangulation)

ある研究を様々な視点から見るために、複数の方法を用いること。

- 理論のトライアンギュレーション
  一つの課題に対する研究で異なった理論的見方を適用する。
- 方法のトライアンギュレーション
  2 つ以上の異なった方法を用い、一つの方法によって得られた知見を別の方法によって確かめる。
- データのトライアンギュレーション
  異なったグループ、異なった場、異なった時期からデータを得る。
- 研究者のトライアンギュレーション
  2 人以上の研究者が研究を行う。

6.1.2 メンバーチェッキング(member checking)
データの解釈が妥当であるか、真実を示しているかどうか、生データ(テープ起こしをしたもの)、予備的解釈、最終報告について、研究参加者によるチェックをしてもらう。

6.1.3 濃密な記述(thick description)
濃密な記述には 2 つの意味がある。1つは、研究する人々の行為の意図と意味を解釈し、研究する現象の意味を深くとらえた証明であるということ、2 つ目は記述されている出来事を経験したことがあり、もしくはそれを経験することができたという感覚を読み手につくり出すような生き生きとした真に迫った記述であり、読者が研究結果を自身の実践に適用可能か判断できるだけの詳細な状況が記述されているかとい意味である。濃密な記述により、読者が研究結果を別の文脈でも応用可能である判断できれば、研究結果を実践できる可能性が高い。

(グレッグ他、2007)

6.2 研究の評価
研究の評価を行う際には、量的研究、質的研究それぞれに適した判断基準で、研究の評価を行う必要がある。

研究の判断基準

量的研究	内的妥当性 (internal validity)	外的妥当性 (external validity)	信頼性 (reliability)	客観性 (objectivity)
質的研究	信用性 (credibility)	移転性 (transferability)	信憑性 (dependability)	確証性 (conformability)

<u>量的研究</u>
・ 内的妥当性
測定したい対象が性格に測定できているか。データから結果が導けるか。
→独立変数(原因となる変数)と従属変数(結果となる変数)の間の因果関係について、その因果関係が存在するという記述(因果検証)
・ 外的妥当性
結果がどれだけ一般化できるか。条件を変えて研究をしても同じ結果が得られるか。
→研究結果の一般化可能性(研究の結果がどの程度一般的なものであるか)を確認。異なる被験者や違う状況設定での追試実験(一度きりの結果を一般化していないか)
・ 信頼性
結果に一貫性があるか。同じ調査方法で、同じような結果が得られるか。
→同じ測定を同じ被験者や同じ状況で実施した時、何度やっても同じ結果になるかという検査法の一貫性。信頼性の測定法として再検査法(ある検査を日時をおいて 2 度施行した場合の相関)。信頼性の指標として信頼性係数(coefficient of reliability: 例として Cronbach α)。内的整合性の検証としての α 係数。
・ 客観性
中立的で偏りがないか。
→あらゆる被験者や場面に適応する測定。採点者の個人的判断が採点に影響していないこと。客観的検査として、真偽法、多肢選択法、組み合わせ法、完成法。

<u>質的研究</u>
・ 信用性
データは信頼できるものであるか。
→研究参加者との長いかかわり、長期的な観察、トライアンギュレーション、研究者仲間によるデータ分析・結果の評価、参加者による分析データのチェック

・　移転性
ある特定の研究データや結果をその質的研究が当てはまる母集団に移転して読み取れるかどうか。
→研究結果を他に移転して適用できるか評価できるように、研究の理論的枠組みについての十分な記述
・　信憑性
研究が明解であるか。
→読者が研究の理論とプロセスを辿れるように、研究プロセスの十分な記述（理論、方法論、分析方法の選択をどのように行ったか）
・　確証性
研究の結論や解釈がデータから直接引き出されていることが読者に確かめられるか。
→研究方法・プロセス・分析結果の十分な記述

7. 推薦文献

質的研究法一般

Bryman, A. (2001). *Social research methods*. Oxford: Oxford University Press.
比較的読みやすいレイアウトで、量的・質的研究両方の研究手法と論文の書き方を知るためによい参考書である。（割と分厚い）

Cohen, L., Manion, L., & Morrison, K. (2003). *Research methods in education.* London: Routledge.
理論的視点の解説も含め、研究デザインの立て方、量的・質的研究両方の研究手法が網羅されている。辞書的な使用もできる。（割と分厚い）

Creswell, J. W. (2007). *Qualitative inquiry & research design: Choosing among five approaches.* Thousand Oaks, Sage publications.
質的研究の代表的な５つの手法 Narrative research, Phenomenology, Grounded theory, Ethnography, Case Studies の方法論と研究手順について、比較しながら解説している。どの手法を用いるべきか迷っている人にお勧め。

Holliday, A. (2007). *Doing and writing qualitative research*. London: Sage Publications.
質的研究の初心者と研究者の両方を対象に、質的研究の研究方法から論文の書き方まで事例を紹介しながら、解説している。著者はイギリスの大学の応用言語学部の教授。

Richards, K. (2003). *Qualitative inquiry in TESOL.* Basingstoke: Palgrave Macmillan.
TESOL と応用言語学の分野における質的研究書としてお勧め。手軽な著書だが、具体的な研究方法の詳細が知りたい人にはやや物足りない。

やまだようこ（編）(2007).『質的心理学の方法－語りをきく―』 新曜社
質的方法の研究法と教育方法について、標準的な知識と具体的な手法について解説している。心理学が中心であるが、質的研究に関心のある研究者と指導者の両方にお勧め（初級レベル）。各章の最後に記載されている参考文献も、解説つきで参考になる

質的研究入門書

秋田 喜代美・藤江 康彦(編). (2007).『事例から学ぶはじめての質的研究法 教育・学習編』 東京図書
質的研究を行おうとしている初学者を対象に、すぐれた研究事例を中心として質的研究の方法や手続きの紹介・解説がされている。巻末の書籍紹介も役立つ。

C.ウィリッグ（著）上淵 寿・大塚まゆみ・小松孝至（訳）(2003).『心理学のための質的研究法入門［創造的な探求に向けて］』 培風館

Flick, U. (2002).『質的研究入門－＜人間の科学＞のための方法論』(小田 博志, 春日 常, 山本 則子, 宮地 尚子, 訳) 春秋社 (Flick, U. (2006). *An introduction to qualitative research (3rd ed.)*, London: Sage Publications.)
質的研究の代表的な技法を網羅しており、それぞれの長短を勘案しながら、比較している。質的研究

の入門書としてお勧め。巻末の訳者による日本語文献の紹介と質的研究用語集も役立つ。

グレッグ美鈴・麻原きよみ・横山美江（編著）(2007).『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方　看護研究のエキスパートをめざして』 医歯薬出版株式会社

看護研究者が対象であるが、薄い著書ながらも豊富なイラストと図により、研究課題の設定、手法の選択、主要な手法のデータ収集法、データ分析法、論文執筆について大変分かりやすく解説されており、教育学の研究者にとっても参考になる。

Holloway, I. & Wheeler, S. (2006).『ナースのための質的研究入門－研究方法から論文作成まで』（野口美和子，監訳） 医学書院（Holloway, I. & Wheeler, S. (1996). *Qualitative research for nurses.* Oxford: Blackwell Science.）

ナースのためというタイトルがついているが、教育学分野の研究者でもとても参考になる。訳出の際の用語解説も親切なので、質的研究の入門書としてお勧め。

小林奈美（監訳）(2008).『はじめて学ぶ質的研究』 医歯薬出版株式会社（Richards, L. & Morse, M. J. (2007). *Read me first for a user's guide to qualitative methods.* Thousand Oaks, Sage publications.）

なぜ、質的研究を行う必要があるのか？質的研究を行う前に研究者はどのような準備をすべきか？など、研究を行う主体である研究者自身のあり方について考えるために、他の研究書を読む前に、まず読んでほしい初学者のための著書。

波平　恵美子・道信　良子(2005).『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして』医学書院

質的研究についてのエッセンスだけを集約した薄手の読みやすい入門書。質的研究の特徴や成立の背景を論じるとともに、具体的に研究手順を Step ごとに示している。

無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ（編）(2004).『質的心理学　創造的に活用するコツ』新曜社

質的研究とは何かから、データ収集、分析、論文のまとめ方まで、コンパクトながら大変分かりやすく書かれており、初心者でも読みやすい。

Punch, F. K., (2009). *Introduction to research methods in education.* London: Sage Publications.

研究法について知識がない学部生と大学院生対象に書かれており、量的研究法、質的研究法について網羅的にしっかりと理解できる。（少し分厚い著書なので、じっくり取り組みたい方向け。）

西條剛央(2007).『ライブ講義　質的研究とは何か SCQRM ベーシック編』 新曜社

『ライブ講義　質的研究とは何か SCQRM アドバンス編』 新曜社

質的研究を初めて学ぶ学生のために対話形式で記述されており、今までになかったタイプの著書で、イメージをつかみやすい。「質的研究とは何だろう？」という基礎から学びたい初学者向けに書かれている。（特にお勧め！）

<u>グラウンデッド・セオリーアプローチ</u>

Glaser, B. G. & Straus, A. L. (1996).『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』（後藤　隆，水野　節夫，大出　春江，訳）新曜社（Glaser, B. G. & Straus, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research.* Chicago: Aldine Publishing Company.）

Straus, A. L. & Corbin, J. (2004).『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順（第2版）』（操　華子，森岡　崇，訳） 医学書院（Straus, A. L.. & Corbin, J. (1990). *Basic s of qualitative research: grounded theory procedures and techniques.* London: Sage Publications.）

上記2冊は、グラウンデッド・セオリーアプローチの基本書。

戈木クレイグヒル滋子(2006).『グラウンデッド・セオリーアプローチ—理論を生み出すまで』新曜社

戈木クレイグヒル滋子(2008).『質的研究法ゼミナール—グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ　増補版』 医学書院

戈木クレイグヒル滋子(2008).『実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社

上記3冊は、グラウンデッド・セオリーアプローチの権威ストラウス氏とコービン氏から指導を受け、看護学博士課程を取得した筆者による著書。具体的事例を挙げながら、大変分かりやすく解説している。

木下 康仁(2003).『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂

木下 康仁(2005).『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』 弘文堂

木下 康仁(2007). 『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂

上記3冊は、グラウンデッド・セオリーアプローチに著者独自の修正を加えた「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」について解説している。

キャシー・シャーマズ(2008).『グラウンデッド・セオリーの構築 社会構成主義からの構築』(抱井尚子・末田清子、監訳)(Charmas, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage Publications.)

グレイザー氏とストラウス氏から学んだ後、独自の研究哲学に基づく「構成主義版グランデッド・セオリー」と呼ばれる方法論を提案。フィールドの根ざした、シンプルで柔軟な第二世代のグラウンデッド・セオリー・アプローチの方法論について解説している。

<u>ケーススタディ・エスノグラフィー</u>

Merriam, S.B. (2004).『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディ』(堀 薫夫, 久保 真人, 成島 美弥, 訳) ミネルヴァ書房 (Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study applications in education.* (revised.). San Francisco: Jossey-Bass Publishers.)

質的研究法の入門書かつケーススタディについて詳細に解説されている。

箕浦康子 (編著) (1999). 『フィールドワークの技法と実際：マイクロエスノグフィー入門』ミネルヴァ書房

5 年間の講義で蓄積されたノウハウがまとめられており、マイクロエスノグラフィーの技法と研究事例が紹介されている。

<u>観察法・面接法</u>

鈴木敦子(2005).『調査的面接の技法』 ナカニシヤ出版

面接の技法について詳しく解説。これ一冊あれば、面接法が良く分かる。

松浦均・西口利文(編)(2008).『観察法・調査的面接法の進め方』 ナカニシヤ出版

学部レベルの「心理学の研究法」の実習や演習の初学者向けテキストを作る目的で企画されたテキストシリーズの第 3 巻。基礎を抑えたい初学者向け。

Vaughn, S., Schumm, J. S., & Sinaqub, J. M. (1999).『グループ・インタビューの技法』 (井下 理, 柴原 宜幸, 田部井 潤, 訳) 慶應義塾大学出版会 (Vaughn, S., Schumm, J. S., & Sinaqub, J. M. (1996).*Focus group interviews in education and psychology.* London: Sage Publications.)

フォーカス・グループ・インタビューについて、教育・心理学などでの応用を中心に理念から準備・実施・分析まで丁寧に解説されている。

<u>その他</u>

Bailey, K. M., & Nunan, D (Eds.). (1996). *Voices from the language classroom: Qualitative research in second language education.* Cambridge: Cambridge University Press.

タイトルが示すように、第二言語教育における質的研究論文集。論文の内容そのものが教育者にとって興味深いだけでなく、研究課題の設定、データの分析方法、論文の執筆スタイルなどが参考になる。

Crotty, M. (1998). *The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process*. London: Sage Publications.

理論的枠組みとその背後にある哲学的概念を理解したい方の必読書。

L.リチャーズ著(大谷順子・大杉卓三訳)(2009).『質的データの取り扱い』 北大路書房

「はじめに手法ありき」ではなく、「はじめにデータありき」を出発点とし、データの管理、整理、分析につ

いて詳細に解説。

佐藤郁哉(2008).『質的データ分析法』 新曜社

質的論文執筆に慣れていない研究者の問題点を7つに分類し（読書感想文型、ご都合主義的引用型など）、「薄い記述」を「分厚い記述」に変えていく方法と手がかりについて多様な図式を用いて解説している。質的データ分析と記述の方法に悩む方にお勧め。

<u>質的研究に関する論文</u>

Brown, J. D. (2005). Characteristics of sound qualitative research. *Shiken: JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter, 9*(2), 31-33. Retrieved January 13, 2008, from http://www.jalt.org/test/bro_22.htm.

Chaudron, C. (1986). The Interaction of quantitative and qualitative approaches to research: A view of the second language classroom. *TESOL Quarterly 20*(4), 709-717.

Creswell, J. W., & Miller, D. L. (2000). Determining validity in qualitative inquiry. *Theory into Practice, 39*(3), 124-130.

Davis, K. A. (1995). Qualitative theory and methods in applied linguistics research. *TESOL Quarterly, 29*, 427-453.

Edge, J. & Richards, K. (1998). May I see your warrant, please?: Justifying outcomes in qualitative research. *Applied Linguistics, 19*(3), 334-356.

Freeman, D. (1995). Asking "good" questions: perspectives from qualitative research on practice, knowledge, and understanding in teacher education. *TESOL Quarterly, 29*(3), 581-585.

Lazaraton, A. (1995). Qualitative research in applied linguistics: A progress report. *TESOL Quarterly, 29*(3), 455-472.

Lazaraton, A. (2003). Evaluative criteria for qualitative research in applied linguistics: Whose criteria and whose research? *Modern Language Journal, 87*(1), 1-12.